李退溪思想の体系的構成（要訣）

――「聖学十図」を中心として――

高橋　進

序

従来の李退溪研究において、言及はされていたが、十分に解明されていない点は、彼の哲学思想がいかなる体系性をもち、いかなる体系的内容をもっていたか、ということである。彼の遺した思索と実践の記録は、ぼう大なものであるが、決して体系的に記述されてはいない。儒学は本来、己れを修め、人を治める日用実践の学であって、いわゆる哲学的思索をもととした体系的学問でない。しかし、宋代に興った新儒学は、朱子において集大成されることによって、著しく思索と実践が深められ、「性理学」といわれるように、体系的内容をもつに至った。周知のことである。

宋学における宇宙論、世界観ないし存在論は、『易』の論理を深めることによって、西欧のそれに劣らぬ、個性的な思想体系を構築した。また、深い人間探求の結果、人間存在の理法を、彼らの世界観ないし存在論に呼応させて確立し、それによって、実践の論理と内容が反省的に明らかにされた。周知のように、李退溪は、古来の伝統的儒学を踏まえ、宋代の新しい儒学を、最も正統に理解し、受容し、さらにみずから個性的な思想形成を行なった偉大なる思想家である。先にも述べた如く、李退溪思想は決して体系的に明確に記述されてはいないが、後世のわれわれは、彼の個性的な思想形成の中に、その中核となる骨組みないし思想的体系を見出すことができるし、またそれを明らかにしなければならない。それによって、われわれは、より一層明確に彼の思想を理解し、またその思想の現代的意義を把握することができるであろう。

その最初の試みとして、ここでは、彼の最晩年、六十八歳の時（一五六八）、宣祖王に上疎した「聖学十図」を手がかりに考察することにしたい。李退溪はこの年、「経筵官」の職にあり、新

しい王に直接経典を講義し、古今の歴史と時の政治に対して論評を行うべき責任をもっていた。しかし、年来の病弱でその職責を十分に果たすことができないので、辞職の願いを出していたが許されなかった。そこで彼は、この年(一五六八)の八月に、有名な「戊辰六条疏」を宣祖王に奉った。六項目から成る長文の帝王学に関する論文で、李退溪の政治思想の根本をなすものである。年譜によると、その後も、彼は十一月までに八回にわたって王の前で講義をしているが、それでも十分に職責を果たしていないと反省し、この年の十二月に「聖学十図」を王に奉った。その序文にあたる部分が「聖学十図を進る箚」である。「戊辰六條疏」が、新王の必ず守らねばならない政治上の重要事項を述べてあるのに対し、「聖学十図」は、文字通り帝王として学び、且つ実践・修得すべき儒学の枢要を図表にして示したもので、この二論文は、李退溪の最晩年の最も重要な思想を述べた著作である。

ところで、この「聖学十図」は、李退溪の独創的な思想そのものを全面にわたって述べたものではなく、朱子をはじめとする宋代儒学に関する十篇の資料(うち『大学』は古典)によって構成されている。しかし、何故に、彼は数限りなく存在していた他の資料を取りあげずに、この十篇を選択したのか？　何故に、このような配列をしたのか？　十篇の資料は、思想内容においてどのような関連性をもっているのか？　各篇に附せられた彼の解説は、いかなることを述べているのか？　これらの具体的視点からこの「聖学十図」を考察することによって、彼の思想の根本にある体系性をわれわれは発見することができるであろう。何となれば、彼がかかる十篇の資料を選択し、このように配列をし、それぞれに彼自身の見解を附説したのは、実はすでに、彼自身の内部において、彼の思想が体系的にできあがっていたからであり、それを具体的に表現するのに、このような方法を用いたのだとみることができるからである。まして、これは、時の王に対して奉ったものである。自説を世間一般に、あるいは自分の弟子に披瀝するならばともかく、一国の最高の地位の人に対して、臣下として自説を学ばせ、実践させることは、当然はばかられる。あくまで、古来の聖賢の言をとりあげ、それに自説を仮託し、あるいはつけ加えてこれを奉ったのである。以下では、くり返し「聖学十図」を通読し、その内容を分析・解釈し、さらに李退溪の附説によりながら前後の論理的脈絡を明らかにし、それによって、彼の内なる思想的体系を再構成してみよう。

一、学問の目的と方法

いうまでもなく「聖学十図」は、時の王に奉った帝王学である。しかし李退溪も第五図の附説において、帝王の為すべきこと、為すべからざることは、他とはことごとくは同じでないが、人倫に基づいて、理を窮め努力修養し、それによって心の修養の最要訣を求める点では、帝王の学も一般の学問も異るところはないと述べている。従って、今日われわれがこの「聖学十図」をみる立場は、学問一般のあり方を述べたものとして差支えないであろう。

儒学の目的は、周知の如く、己れを修め、人を治めることにある。それを最も端的に述べてあるのは『大学』である。その骨子は、身を修め、家を斉え、国を治め、天下（世界）を平和にすることであり、また明徳を明らかにし、人民の旧蔽を改め、最高善に至ることであった。さらに身を修めるとは、その心を正すことであり、その意を誠にすることであり、そのためには、まず物に至って知を推し極めることであった。

李退溪においてもこのことは当然であった。しかし彼は「聖学十図を進る箚」（以下では「序文」という）において、さらに彼独自の儒学の目的・方法に対する見解を明らかにし、これを強調している。即ち、彼にとって、最も重要なものは人の心である。心は一身の主宰であり、人間の意識や行動のあらゆるきざしは心から出るし、従って人間の言動のあらゆる責任は心にある。諸欲の攻め合いも、邪悪もすべて心が発端であるから、学問の根本は、この心をいかに正しく働かせるかにかかっている。

そもそも、人間の心の本来の姿は、全くの無内容でありながら、しかもすぐれた働きをもっている。そのすぐれた心の働きの主たるものは「思う」ということである。従って、思うという心のすぐれた働きが十分に働いて、事物の理を窮めることができれば、聖人となるきざしがそこにみられる。

そこでさらに李退溪は『論語』の「学んで思はざれば罔し。思ふて学ばざれば殆ふし。」を引き、事を習ってこれを真に実践することを説いたものという。李退溪によれば、聖学はまず何よりもこれを心に求めなければ、物事に昏く、これを十分に得ることができない。故に必ず思うことによって、事物の微細に通ずることができる。また、事を学んで習わなければ、身にも心にも定着することがなく、危くして不安である。故に、思うことと学ぶこととは、互いに触発し合い、互いに益するのでなければならない。思と学、学と実践とはそれぞれ相待ってなされなければならない。思うことも、学ぶことも、実践することも、先に述べたように、結局は心の働きに帰せられる。聖学においては、心のあり方こそが最も重要である。李退溪はそれを「敬を持すること」だという。彼によれば、「持敬」こそ、思と学とを兼ね、動静を貫き、内外を合し、顕微を一にする根本の方法である。「持敬」とは、わが心をつつしみ整え、静かに一点に集中させることである。心が発動すると、思惟も感情も意志も、したがって行為もあらわれる。従って、敬によって心をコントロールすることは、自己の人間としての有機的な働きの一切をコントロールすることである。つまり、敬を持するとは、極言すれば心が心を制御することである。このことの理を、明らかに自覚して、物事を学び、問い、思い、弁別する際に具体的に生かし適用する。それによって、睹えない前、聞えない前のところにおいて、自己を戒め懼れる。自己を戒め懼れることがより厳しければ、自己を反省し究明することも益々精密になる。これが李退溪のいう聖学を学び実践する根本的態度ないし方法としての持敬の内容である。彼はさらに、わが身・わが心を畏れ慎しむことが日常生活から離れなければ、心の働きに中庸と

和が得られ、天地もそれぞれ所を得て、万物は育成するし、また、徳ある行為が人の常の道からはずれなければ、天と人と合一するという妙境もおのずから開けるであろうという。

二、「聖学十図」の構成と思想的関連性

「聖学十図」は次のように構成・配列されている。

○第一太極図…周濂溪の図及び図説、朱子の解説、李退溪の補説。図の説明は、李退溪が朱子の「太極図説解」の中から要約して引用したものと思われる。

○第二西銘図…張横渠の「西銘」、程林隠の図、朱子と楊亀山の解説、李退溪の補説から成る。

○第三小学図…題辞、李退溪の図（「小学」の目次のみをとって構成する）、朱子の「大学或問」の一部、李退溪の補説からなる。

○第四大学図…「大学」の第一章、朱子の「敬」に関する説、李退溪の補説からなる。

○第五白鹿洞規図…朱子の後序、李退溪の図及び補説からなる。

○第六心統性情図…程林隠の図説。上図は程林隠の作、中・下図は李退溪の作で、退溪の補説がある。

○第七仁説図…朱子の仁説、李退溪の図及び補説からなる。

○第八心学図…程林隠の図説及び図、李退溪の補説からなる。

○第九敬齋箴図…朱子の「敬齋箴」及び解説、王柏の図、呉臨川と真西山の解説、李退溪の補説からなる。

○第十夙興夜寐箴図…陳茂郷の「夙興夜寐箴」と李退溪により第九図と対照して作られた図及び補説からなる。

以上が「聖学十図」の全体の構成であるが、すでに前項で述べたように、この十図の前には「聖学十図を進る箚」が附けられており、それは序文の役割を果たしている。次に、李退溪が各図の末尾に附した補説によりながら、十図がどのような思想的関連をもって、配列され、構成されているかを明らかにしよう。

①李退溪は、「この十図は、みな敬をもって主となす。」（第四図補説）といい、「敬は（理論と実践など）上から下まで一貫して工夫努力し、効果を収めるために用い、これを失うことがあってはならぬ。」（同上）という。序文において述べたことを、十図全体について再び明らかにしている。次の項で明らかにするように、各図には「敬を主とする」ことが、直接・間接に述べられている。

②李退溪は、小学（第三図）と大学（第四図）を非常に重要視し、両者は「一にして二、二にして一」（第三図補説）という関係にあるという。従ってまた、大学・小学の二説は「通して看るべきもの」（第四図補説）であり、さらに、「上下の八図はすべてこの二図を通じて看るべきもの」（同上）という。

③第一図・第二図は、「（学問の）端緒を求めてこれを拡充し、天（自然または世界全体）を把握・理解してその道理を究め尽くす根本のところであり、また、小学・大学の標準ないし根本である。」（第四図補説）

④第五図から第十図までは、「善を明らかにし、身を誠にし、徳を崇くし、学業を広めるのに努力すべきことであり、小学・

大学を適用し、効果をあげる場所である。」（同上）

⑤第一図から第五図までの五つの図は、「天地自然の道理に本づいており、その具体的効果は、人倫を明らかにし、徳行に努めるところにある。」（第五図補説）

⑥第六図から第十図までの五つの図は、「心の本性に原づいており、その具体的要件は、日常生活において実践に努め、敬しみ畏れる心を崇くするところにある。」（第十図補説）

以上の李退溪の各図に附せられた補説によって、十図は相互にどのような関連をもって構成され配列されているか、また各図はいかなる意義をもっているか、概要を知ることができるであろう。これをさらにわかり易く敷衍してみると次のようにいうことができる。

「聖学十図」の軸になるものは、『小学』と『大学』である。この二書は、人が幼年から成人に至る間に、何を、どんな目的で学ぶべきか、その結果ないし成果として、人はまず個人としてどんな人間になるべきか、また一家の成員として、国家・社会の成員として、さらに世界人類の一員として、何を為すべきかを明らかにしたものである。しかもこれは、聖学、つまり古代以来の伝統的儒学の根本の教えを集約したものである。従って、本来はこの二書で十分であるが、さらに二書の内容を、理論的にも実践的にも詳細に明らかにするために新儒学の種々の材料を選び、系統的・関連的に配列して、ひとつの体系をつくったものということができる。それ故、李退溪は、『大学』・『小学』は二に一、一にして二の関係にあるとし、さらに、他の八図全体もこの二図を通じ、これを基にして理解し実践せよといったのである。

第一図・第二図は要するに聖学における世界観ないし存在論を述べたもので、これによって、世界ないし存在の窮極の理法を明らかにし、さらに『小学』・『大学』の根本的なよりどころとしたのである。そこで次に、この二書の内容をさらに具体的に実践し、自己形成をするための詳細な方法・場所が明らかにされた。それが、三図・四図（小学・大学）以下の五図から十図までである。

ところが李退溪はこれに止まらず、世界ないし存在の理法と人倫の理法との論理的な関連性・斉合性を明らかにし、それによって、よき行為の為されるべき理論的な根拠・枠組み・当為をも示した。それが第一図から第五図である。これに対して、よき行為を為す人間主体が問題になる。その中心は、人の心の働きである。人間の本性とは何か、心や情はどのように働くのか、わが心をどのように育て養えば聖学の目指す人間像に近ずくことができるか、これらの問題を明らかにしたのが第六図から第十図である。

しかも、すでにくり返し述べた如く、十図の全体、従って李退溪の思想の全体を貫くものは敬であった。何故に敬がそのような理論的・実践的意義をもちうるのか。これはさらに、以下の各項で解明しなければならない課題である。

三、世界存在と人間存在

李退溪によれば、第一図と第二図は、聖学の端緒を求め、こ

れを拡充し、世界ないし存在一般の根源を把握して、その理法を明らかにする最も重要なところである。

第一図は、したがって、造化を説いたものと彼はいう。造化とは、あらゆる存在の生成・変化の根源であり、理である。存在の根源であるから、朱子もこれを「道理の最高のもの、百世にわたる学術の渕源」といったのである。「太極図説」では、その造化の理を「無極にして太極」という。これについては様々な解釈ができるが、ここでは端的に、太極とは事物がまだ個別化されない前の混然たるもの、あらゆる個物存在の全体、もの一般であり、従って、論理的な一気であるといっておこう。太極が論理的な一気であるとすれば、無極はその論理的な一気がもつところの、あらゆる事物の存在の根源、働きの根本原因であると解せられる。いうまでもなく、両者は二にして一、一にして二という論理的関係をもつ。しかし、太極はもののもととという意味で、事物に近いが、無極は純粋な形而上的性格を表現しているということもできよう。かくして、無極・太極は、世界ないし存在の純粋な理法としての性格と、そこから個物が生成し、それによって個物が変化・運動する能動因としての性格をあわせ持つものと解せられる。朱子の理気二元論の立場では「太極はただ一箇の理の字」とされ、無極・太極はあくまで形而上的なものとされるが、「太極図説」の「無極にして太極」には、純粋なる形而上的な理の性格と、もののもととしての論理的な一気の性格がある。李退溪があえて「太極図説」を選んだのは、単に、すでに周濂溪が図に示してあったから、という理由によるものではないと思われる。「太極図説」における理の能動因的性格は、李退溪の性・情の論と重大な関係があると筆者は考えている。

さて、右のような意味ないし性格をもった太極が運動と静止を交互にくり返し、循環することによって、陰陽二気が生じ、五行が生じる。二気と五行の変化・交替によって万物が生成する。二気も五行も万物も、もとは、太極の運動によって生成されたものであり、その根本原因は無極である。従って、あらゆる事物には、つねに事物の存在ないし働きの根本原理としての無極・太極が内在している。

人間は、二気・五行の最もすぐれた働きによって生まれたものであるから、人間を生み出した能動因としての無極・太極あるいは理は、最もよく人間に具わっている。それが人間の本性である。故に聖人は、世界ないし存在の理（無極・太極）をもって、人間の則るべき根本の理法としたのである。朱子の解説によれば、この理法を最もよく自覚し体得するには、心を敬（つつ）しむことである。心を敬しむことは欲を少くすることであり、無欲の状態に至ることによって、人間の本性を自覚することができる。無極・太極は、陰陽五行の運動・変化の前の至静であるから、心を敬しみ、無欲にして至静の状態に至れば、世界ないし存在の理としての人間の則るべき根本理法も体得できるというのである。以上は、第一図に示された、世界観であり存在論であり、また人間存在の根本理法の根拠である。それが論理的過程であって、決して時間的経過でないにせよ、第一図におい

ては、無極ないし太極が、存在あるいは生成の原理として措定され、それが運動し変化して、二気・五行を生じ、万物を生成すると説明された。人間の則るべき根本の規範も示された。しかし、この存在の原理、変化・生成の原因としての無極・太極と、個物との関係は、さらに、明確に説明されなければならない。それが、第二西銘図においてなされる。

第一図で述べられたように、天地自然の生成・変化は、陰陽二気の運動による。それを象徴的にあらわせば、陽の働きを乾（天をあらわす）、陰の働きを坤（地をあらわす）という。あらゆる事物は、天地の間において生成するから、乾と坤は父と母に類比される。逆にいうと、あらゆる事物は乾と坤、従って父と母とによって生み出される。この生成の理は、すべての事物にとって一般的・普遍的である。ひとつの生成原理からすべてのものが出てくる。生む者と生まれる者との関係ができあがる。生む者が一つであるから、すべての人は同胞である。しかし、すべての人に生む者としての父と母があり、生まれた者として兄弟ができる。そこにおいて、生まれてくる者に、順序ないし秩序ができる。最初に人間世界に生まれる者は、天の子であり、従って最高の君主と家臣、年長者と年少者の相違も生ずる。万人は同胞であるから、老年の者、疾病ある者、孤独な者も、わが兄弟に連なる同胞である。しかし、生まれてくる者には、すべて生む者としての父と母があるから、それぞれに異なる。生成の理からみれば、すべての人は等しく同胞である。ひとつの生む者に統一され、また帰一していく。しかしその反面、それぞれの人には生む者としての親があり、同じ親でも、兄弟が分かれる。従って、この論理は、全くの無差別・平等主義でもなければ、全くの個別主義でもない。平等性と個別性とは、つねにすべての個人々々に内在している。

朱子や楊亀山は、程伊川の説を引きながら、このような論理を、理一分殊（つまり、この世界の生成の理は一つであり、生成される個物はそれぞれに異なり分かれる）として捉える。李退溪は、この理を深く自覚すれば、天地万物と一体になることができる、従って聖学の目的たる仁の実践も切実となり効果があらわれる。それのみか、無差別平等主義にも個人主義にも陥ることを免れる、という。

前項で明らかにしたように、李退溪によれば、第一図・第二図は、聖学の最も重要な端緒であり、これを求め、拡充することによって、自然（全世界または全存在）の生成・変化の状況を知り、それに基づいてその生成・変化をなさしめている理法を明らかにすることであった。くわしく言えば、第一図は、世界ないし存在の根源を問い、その運動によって陰陽の二気と五行とが生じ、変化し交替し、万物を生成するという論理的過程を述べたものであった。第二図は、むしろ、人間の世界に眼を転じ、他の事物と同じく、人間はそれぞれ異って存在しているが、その生成はひとしく世界生成の原理に基づくものであることを述べたものであった。そこに人間存在の平等性と個別性とが自覚され、仁の理論的根拠が得られた。

しかし、以上の如き第一図・第二図における論理的探求は、

いったい何のために為されるのか。その根底ないし大前提が明確になっていなければならない。それを示したのが、第三小学図と第四大学図である。すでに述べたように、第二西銘図は、乾と坤を父母とし、そこに人間生成の原点をみた。それ故、人間はすべてわが同胞であるという平等性の自覚があった。他方で、乾坤は、天地に比類されることから、高下、貴賤、尊卑、先後というような秩序性・順序性も自覚され、年長者と年少者の別、天子（君主）と家臣、親と子の区別が生ずると考えられた。しかし、第二図ではまだ、人の世界全般についての平等性と個別性（差異性）を明らかにしたのみであった。小学図は、教育の方針・内容を確立し、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友等の人間諸関係を明らかにし、心身をつつしみ守ることを内容としている。それは要するに、具体的な日常的なよき生活の具体的行動様式を学び、身につけることであった。ここにおいて、はじめて、親子の関係や兄弟の関係、朋友の関係が具体的にいかにあるべきかを明らかにしているのである。また心身の訓練が、清掃、人との対応、諸々の行動、礼儀、射、御、書、数等を通じて具体的になされる。このような、具体的な諸々の人間諸関係の中での具体的行動様式も、世界ないし存在の原理と共通する人の本性の発露でなければならないのは当然であった。

そして、このような基本的行動様式の訓練を通じ、技芸の修熟を通じて心身を形成していく先に、大学がある。第四大学図は、小学を経てさらに学ぶ者の、学問の目的・内容を明示している。すでに第一項で述べたように、それは、身を修め、家を斉え、国を治め、天下（世界）を平和にすることであり、その根本には、自己の内に具わる明徳を明らかにし、人民の旧蔽を改め、最高善に到達することが最終目的として措定されていた。さらにそれらの諸目的を達成するためには、心を正し、意を誠にし、物に至って知を推し極めることが要請されていた。従って、小学・大学を通じて学問の目的・方法をみると、小学が専ら日常生活における基本的な行動様式の訓練を通じ、技芸の修熟を通じて心身を育成しようとするのに対して、大学は、儒学本来の目的とする己れを修め、人を治めるための学問及び実践の要点の全ての内容を掲げている。その根本は、いうまでもなく、己れを修めることである。大学では、それは心を正し、意を誠にし、物に至って知を推し極めることであった。

ところが、「聖学十図」の第四大学図においては、李退溪は、朱子の敬に関する説を引用している。即ち、敬は一心の主宰であり、萬事の根本であるから、あらゆる努力・修養の中心は、心の敬を持することである。従って、小学は敬を持することから始め、大学は敬を持することの終り、ないし完成でなければならないという。敬はまさに、聖学の始めと終りをなす要訣であるとされた。李退溪はさらに、敬は上から下まで、あらゆる事について、工夫をし効果を収めるために必要なもので、これを失ってはならぬといい、聖学十図は、すべて敬をもって主とする、といっている。第一項で述べたように、敬を学問の中心ないし根本とする李退溪の思想が、ここにおいてさらに明確にされたのである。

さて、第五図に朱子の「白鹿洞規」を示したのはなぜか。朱子は次のようにいう。古来の聖賢が人に学問をすることを教える眞意をみると、義理を明らかに自覚し、身を修め、それをもって他人に推し及ぼすことであった。多くの書物を読んで記憶したり、詩や文章を作って、名声を博し、利禄を得ようとすることではなかった。しかし、今の学問をすることはこれと異なり反している。そもそも、聖賢が人に学問を教える内容・方法は、すでに経の中にあり、これを熟読し、深く思索すれば、当然の道理も、必然の責務もおのずからわかる。学問の態度や方法に関する規準や禁止事項は、他人から設けられて守るものではない。

これによってわかるように、古来の伝統的儒学の内容・方法はすでに明らかであり、それの中心は五つの人倫を明らかにし、これを確立することであった。あらゆる学問と実践は、この五倫に基づき、これを確立することを目的としてなさなければならない、と李退溪は補説でいう。従って、帝王の学問の規準や禁止事項も、一般の学者とすべて同じではないが、その基本において変るところはないと、彼はいうのである。聖学は、博識や詩文をよくすることに目的があるのでないこと、五倫・五常を明らかにし、確立することであることを、第五図において改めて強調し、学問の範囲を限定したのである。それ故、李退溪は以上の五図について、これは世界ないし存在の理法に基づいており、その効果は、人倫を明らかにし、徳行に努めることにある、と最後に述べているのである。

四、人間の心と性

第一図から第五図までは、要するに、小学・大学によって、学問の目的・内容を明らかにし、それが世界ないし存在の理法に基づくものであること、さらにその理法は人間存在の理法に類比されることによって、人間世界における秩序や基本的な人倫（人間関係）を導き出し、聖学としての学問及び実践の範囲を限定的に明示したものということができるであろう。第六図から第十図までは、主として学問ないし実践の主体であるところの人間の内面的な心や性について明らかにするとともに、敬の実践の場及び時を示したものということができよう。

第六図は、程林隠の図を改正して掲載し、さらに以下のような李退溪の重要な理・気・性・情に関する説が述べられている。即ち、第一図で示された如く、すべての存在する事物は、それの生成・変化の原理を、無極ないし太極としてそなえていた。人間も一個の存在として、気を稟けて生まれるとき、当然、その原理を内在的にもっている。それが人間の本性であり、純粋にして至善のものとされた。従って、この本性がそのまま発動して情となっても、この情に不善はなく、いわゆる「四端の情」とされる。それのみか、本性のそのままの発動においては、喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲の七情ですら善であると李退溪はいう。

ところが、一個の人間についてみると、人は存在原理としての理と、心身の構成要素としての気によってできている。そこで、この理と気とを合わせて、性をいうならば、この場合の性は、いわゆる「気質の性」である。理気を含んだ気質の性が発動

して情となれば、理と気が相須つ場合と、理と気が互いに害う場合とが生ずる。いわゆる「四端の情」は、理が発動して気がこれにつき随うから、純善無悪である。理が発動してもまだ十分でない時に、気におおわれると、この情は不善に流れる。七情も、気が発動して理がこれに乗れば不善はない。もし、気が発動してほしいままに流れ、理を滅することがあれば、その情は悪となる。人間の性を論ずるときには、当然気もあわせて論じなければならない。しかし、理と気を含んだ、いわゆる気質の性を論ずるときには、本然の性の純粋なる発動をみることができない。李退溪は、気質の性を論ずる大前提として、人間の本性の純粋なる発動の姿を、理想的に描き、最もこれを重要視していたのである。

ところで、理と気とを兼ね、性と情を統合するものは人間の心である。李退溪は次のようにいう。性が発動して情となる、これはまさに心の働きの最も微妙なところである。それはあらゆる心の変化の枢要であり、善悪の分かれるところである。それ故、学者は、敬を持することが最も大切である。心が発動する前は、わが本心を失うことなく、わが本性を守り養い、心が発動すれば、その動いたあとを十分に反省し明らかにする。これが聖学の根本であり、敬を持する基本的な方法である。李退溪はこのように、最も心のあり方を重視し、敬によって心を慎しみ、ひきしめ、整え守っていくことを示している。

性と情を統合し、一身を主宰する心を、敬によって養い守ることを説いたのが第六図であるのに対し、第七図は、もう一度朱子の仁説をもちいて、改めて天地の心と人の心との相関関係について述べる。即ち、朱子は、天地が物を生む心を仁といい、人はこの働きを受けて心としているという。従って、人の心の本来の働きは仁であり、仁は天地が物を生み育てる働きに類比されている。心の発動する前には、人の本性としての四徳(仁義礼智)がそなわっている。仁はこの四徳を統合する。いわゆる「生の性」「愛の理」であり、「仁の体」である。すでに心が発動すると、「四端」があらわれる。惻隠は四端に通ずる心の働きである。「愛の発」「仁の用」である。

以上の朱子の説で重要なのは、仁が体と用に分けられ、従って、愛の理と愛の発(用)に分けられていること、理があらゆる事物に通ずる原理ないし一般者であるのと同様に、仁はすべての徳、善、行為の基とされていることである。さらに、第七図において、仁を天地が物を生む心であるということによって、人の心の本来の働き(人を愛し物を生かす)に類比し、天人相応の論理を示していることが重要である。

ところで、人の心はつねに純粋に、善の方向へ働くだけではない。人の心は欲にも動かされやすい。人が気を受けて生まれると、必ず人心がそなわる。人心は欲に動かされることもあるが、本性に基づいて働くときは道心となる。初めから人心と道心が分かれてあるのではない。従って、人は欲望をおさえ、天理を心に存する努力工夫をしなければならない。これが第七心学図の説くところである。人欲を抑えとどめて心を動かさないようにするためになされるすべての工夫・努力は、敬を離れて

はあり得ない。何となれば、心は一身の主宰であり、敬は一心の主宰であった。道を学ぶ者は、心を一つの方向に集中して他へ傾けず、また心をきびしく整え、清く澄んだ鋭敏の状態におくように努力すれば、聖学に入ることができる。李退溪が第七図を掲げたのは、聖学における心の修養法には多様なものがあること、これらはすべて心を正し、意を誠にし、知を推し極めるための具体的方法であることを示そうとしたのである。

心の修養法は、さらに詳細に具体的に述べられる。第九図と第十図は、まさにそれである。即ち、第九図は、朱子によれば、敬を実践する場の細目をあげたものという。李退溪は、この実践の細目は、よきよりどころとなるもので、日常生活の場において、常に身をもって究明し、反省・自戒すれば、敬が聖学の終始をなすものであることが、真実わかるであろうという。また第十図は、早朝から夜半に寝るまでの、あらゆる時における敬の実践の細目を示したものである。李退溪によれば、そもそも道理は、日常のあらゆる時と処に遍く働いているから、敬を実践しないでよい時も処もない。あらゆる時と処において、心を保ち本性を養い、言動を反省し考察し、効果をあげる方法を述べたのが、第九図・第十図である。敬を実践するあらゆる場を残さず、あらゆる時を失うことなく、常に両方を並び進めることこそ、聖人の域に至る要件である、と李退溪はいう。

そして最後に、彼は第六図から第十図までを総括し、この五図は、人の心や本性に基づいて述べたものであり、その具体的要件は、日常生活において、実践に努め、敬しみ畏れる心をたかめることであるという。そこに一貫して流れているものは、人間における心の働きや本性を明らかにし、それを本来あるように働かしめるためには、敬を持することが最も大切であるということ、敬によってこそ、聖学の始めも終りも成しとげることができるということである。

結語

はじめに述べたように、「聖学十図」は、李退溪の内にある哲学体系の構成的表現である。時の君主に、みずからの言葉をもって、帝王としての学問や具体的実践を促すことは、臣下としてできないことであった。彼は古来の聖賢の言、他者の言をもって、自己の六十八年間にわたって蓄積し、築きあげてきた聖学の思想体系を、理論と実践の両面にわたって、この十図および序文において述べた。とくに彼が各図の末尾に附した補説は、十図の体系的構成を理論的に明らかにしたものであった。

まず彼は、学問の目的・内容・方法を明らかにし、それを、世界観ないし存在論によって位置づけ、さらに人間世界における秩序や人倫を明らかにした。それは一貫した論理によって説明されていた。しかし、理論が明確になれば、当然それの実践主体としての人間が問題になる。人間の心や性や情がいかなる働きをもっているか、いかにして、その本来の働きを実現させるか。この問いに答えるものは、要するに心のあり方である。敬は、人の心の本来の働きを発揮し、人の本性を守り養う根本であった。のみならず、敬は聖学の始めと終りをなすものとして重視された。敬は十図の根本であり、十図は敬を主として説

かれたものであった。

何故に、李退溪はこれほどまでに敬を重視したか。筆者によれば、李退溪に新儒学が受容されたとき、「天命図説」にみられたように、彼には天命概念がほとんど自覚されていなかった。人間の本性は、天の命によって働くのだという意識がなくなったとき、人間の行為の当為性はどこに求めるか。それはまさに、わが心のうちにしか求められない。かくして、心のあり方が極めて重要となる。人間の善なる行為も、学問も、すべて人の心から出発することである。心は一身を主宰するといわれた。そしてその心を主宰するものこそ敬であった。わが心のほかに、自己を人格的に完成させていく原動力はない。天命の意識がないとすれば、われ自身の心が、わが心を正しく導く以外に方法がない。そこに敬が彼の思想の中核にすえられた根本の理由があると思われるのである。